2018 年度
授業改善アンケート実施報告

＜全体の実施状況＞

＜科目群・科目種別の現状と課題＞ ※

・基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて
　　杉田　真衣　（基礎ゼミナール部会長、人文社会学部人間社会学科 准教授）

・情報リテラシー実践Ｉ・ＩＡ授業改善アンケート等について
　　永井　正洋　（情報教育検討部会長、大学教育センター 教授）

・実践英語の授業改善アンケートについて
　　柚原　一郎　（英語教育分科会座長、大学教育センター 准教授）

・未修言語科目の授業改善アンケートについて
　　大久保　明男　（未修言語科目部会長、人文社会学部人文学科 教授）

・理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて アンケート結果からみる FD 活動の成果と課題
　　中谷　直輝　（理学部 FD 委員会委員長、理学部化学科 准教授）

・保健体育科目の授業改善アンケートについて
　　西島　壮　（基礎教育部会・保健体育科目担当、大学教育センター 准教授）

・教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて
　　加藤　俊吾　（教養・基盤科目群検討部会長、都市環境学部環境応用化学科 准教授）

※ 2018 年度前期の結果に基づく報告。ただし、未修言語科目は後期にアンケートを実施しているため、2017 年度後期の結果に基づく報告。

授業改善アンケート全体の実施状況

1　調査概要

（1）実施時期

前期：2018 年 7 月 9 日～ 7 月 27 日　　後期：2019 年 1 月 4 日～ 1 月 25 日

（2）実施対象科目

前期	○ 基礎科目群 ・基礎ゼミナール ・情報科目（情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠA） ・実践英語科目（実践英語Ⅰa） ・理系共通基礎科目 ・キャリア教育科目（現場体験型インターンシップは除く） ・保健体育科目 ○ 教養科目群 ○ 基盤科目群
後期	○ 基礎科目群 ・情報科目（情報リテラシー実践ⅡA・ⅡB・ⅡC） ・実践英語科目（実践英語Ⅱb） ・未修言語科目（ドイツ語Ⅰ・フランス語Ⅰ・中国語Ⅰ・朝鮮語Ⅰ） ・理系共通基礎科目 ・キャリア教育科目 ・保健体育科目 ○ 教養科目群 ○ 基盤科目群

（3）質問項目

問 1：この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。
問 2：授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。
問 3：授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？
（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。）
問 4：この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。
問 5：この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください。
問 6：この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください。
問 7：その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備等について、自由に意見を書いてください。
問 8 ～問 10：＜ 科目群・科目種別ごとの質問 ＞
問 11・問 12：＜ 教員ごとの質問 ＞

2 実施状況（前期）

（1）全体

対象科目数：370 科目　　実施科目数：344 科目　　実施率：93.0％
履修登録者数：19,774 名　　回答者数：15,583 名　　回収率：78.8％
（対象科目における履修登録者数）

（2）各科目群・科目種別

次頁以降の「現状と課題」を参照

基礎ゼミナールの授業改善アンケートについて

基礎ゼミナール部会長
人文社会学部人間社会学科准教授
杉田　真衣

【はじめに】

基礎ゼミナールは初年次の必修の授業であり、少人数（24 人程度）で演習の形式で行われる。その目的は、①能動的な学習姿勢を学ぶ（自ら学び、考え、行動する）、②基本的な技術・能力の修得（調べる、まとめる、発表する）、③豊かな人間関係の形成（グループ討論、共同調査）の三つである。いわゆる知識注入型の一斉授業を相対化し、子ども・生徒が自ら学び考えることを目指す実践は小学校・中学校・高校でも取り組まれており、大学入学以前に主体的な学びを経験してくる学生はいるであろう。とはいえ、「親や教師の言うことを聞いて真面目に受験勉強をしてきたのに、大学に入ったら急に『自分の意見』を求められるようになって困っている」と筆者に吐露してくる学生は何人もいる。学生が自ら問いを立て、その問いを解き明かすために必要な技術や方法を知り、他者と出会い議論しながら問いを深めていけるよういざなうのが基礎ゼミナールである。ここでは、2018 年度の受講者を対象とした授業アンケートの結果を見ていく。

【アンケート結果】

問 1 から問 4 は全科目共通の質問項目、問 8 から問 10 は基礎ゼミナールのみの質問項目である。概して、ここ 3 年の間に大きな変化はない。問 1、2、8、9、10 の回答平均値はいずれも 4 を超えており、良好な結果が維持されている。以下、各質問項目について見ていく。その際、自由記述の設問である問 5「この授業について教員の工夫等、良かった点を書いてください」と問 6「この授業について改善してほしい点を、可能ならば具体的な改善案も含めて書いてください」の回答も参照する。

問 1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった」の回答率を見ると、「そう思う」と「ややそう思う」の合計は 75.1%であるのに対し、「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計は 8.6%であり、概ね役立つものだったといえる。自由記述回答では「シラバスと内容が異なる」、「シラバスの授業の計画をしっかり守ってほしい」という指摘・要望が見られる。学生の能動性を重視する授業であるだけに、計画通りにはいかない場合もあることが推測されるが、学生が納得できる説明が求められるかもしれない。

問 2「授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた」の回答率は、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると 82.2%、「あまりそう思わない」と「そう思わない」の合計が 5.4%であり、理解できなかった学生は少なくなっている。良かった点をたずねる先述の問 5 への回答を見ると、専門的な内容についての解説、学生からの質問に対する応答、発表や課題提出に向けた指導・助言、発表・課題提出後のフィードバックが的確且つ「丁寧」・「親身」に行われたことを挙げているものが多く、このことが「理解できた」と回答した率の高さにつながっていることがうかがえる。ただし、「数学は専門外だと思っていたのですが、楽しく授業を受けられた」というように、専攻外の研究に触れられたことへの肯定的な評価がある一方で、「テーマ設定は専門外の人でも取り組めるものであったが、理解に難しかった」という指摘もあった。全学の教員が担当する基礎ゼミナールには、専攻と異なる分野について少人数で学べる良さがあるが、授業についていけない状況が生じやすいという課題もある。みだりに専門性を低めると、学術的な世界へといざなう基礎ゼミナールの魅力を損なうが、どの学生も第一希望のクラスに入れるわけではないことも考慮に入れた授業づくりが引き続き求められるだろう。

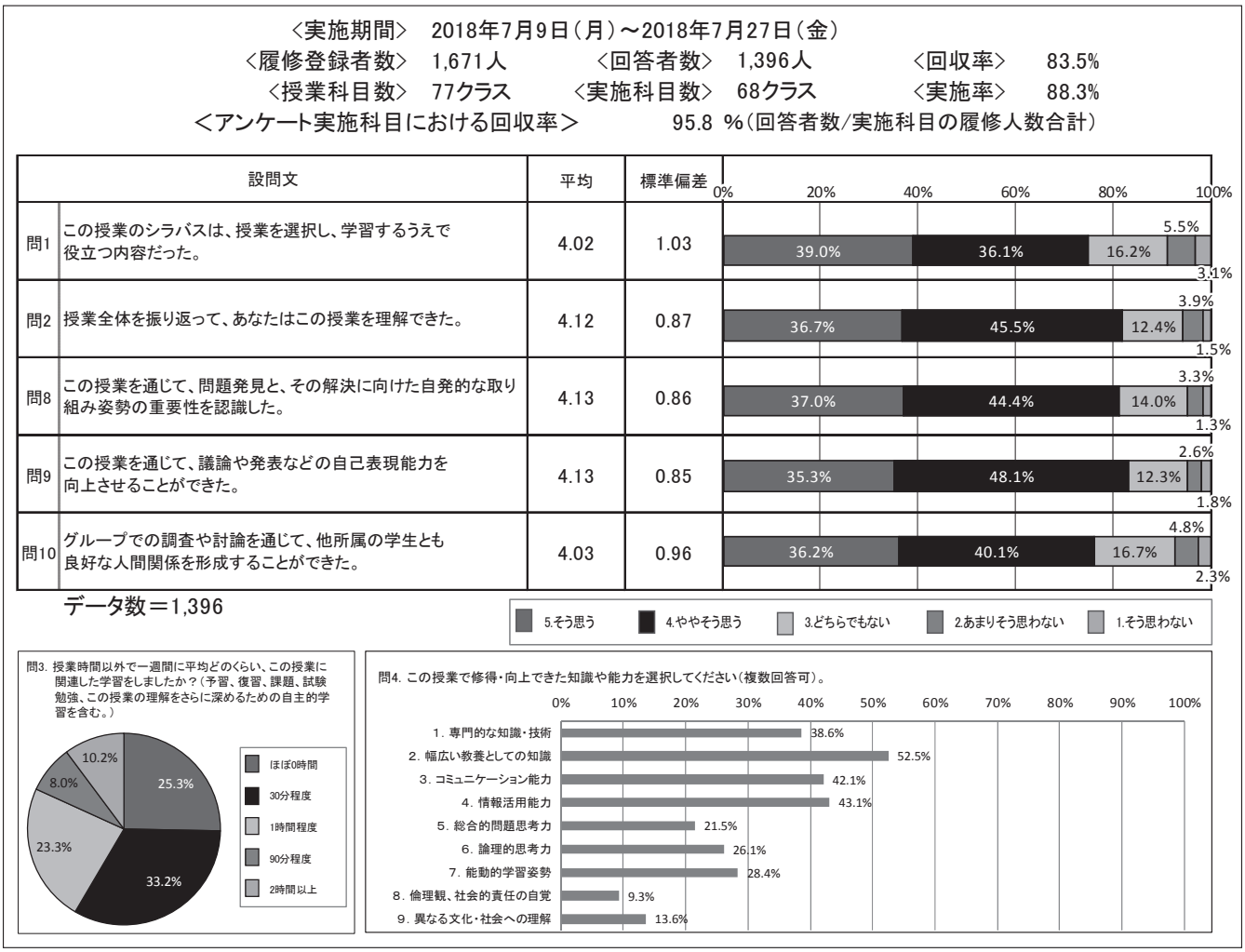
問 3「授業時間以外で一週間に平均どのくらい授業に関連した学習をしましたか？」の回答を見ると、「ほぼ 0 時間」が 25.3%、「30 分程度」が 33.2%で、過半数がさほど学習していない。この結果をどう見るかは、議論になるところであろう。というのも、基礎ゼミナールを担当する教員が集まる基礎ゼミナール懇談会（2018 年度は 12 月 14 日と 1 月 10 日に開催）において、「授業時間内に課題に取り組めるようにしている」という報告があった。学生はいくつもの授業を履修していること、課外活動を通した学びも重要であること、経済的な困難からアルバイトに追われる学生が

少なくないこと等を考えると、授業外学習の時間をただ増やせばいいとはいえない。基礎教育部会主催学生懇談会（2018 年 11 月 8 日開催）では学生から、そもそも何をもって「授業に関連した学習」とするのかという疑問が呈された。授業と直接は関係しなくとも、読書や映画鑑賞も「授業に関連した学習」に入るという学生の指摘はもっともである。

問 4「この授業で習得・向上できた知識や能力を選択してください」で選択する 9 つの項目は、カリキュラムマップに対応している。中でも基礎ゼミナールに関係するのは「コミュニケーション能力」（42.1％）、「総合的問題思考力」（21.5％）、「論理的思考力」（26.1％）、「能動的学習姿勢」（28.4％）である。どの回答率も高いとはいえない。ただし、「コミュニケーション能力」と「能動的学習姿勢」に関わるといえる問 8「この授業を通じて、問題発見と、その解決に向けた自発的な取り組みの姿勢の重要性を認識した」、問 9「この授業を通じて、議論や発表などの自己表現能力を向上させることができた」、問 10「グループでの調査や討論を通じて、他所属の学生とも良好な人間関係を形成することができた」の「そう思う」と「ややそう思う」の回答率を合わせると、それぞれ 81.4％、83.4％、76.3％と高い。問 4 と、問 8 から問 10 の回答結果のいずれを重視すべきかの判断は難しい。自由記述回答では、「自分で課題を見つけ解決して、プレゼンする能力がつくような授業にしてくださった」、「自分たち中心にできてよかった」、「グループワークでは、仲良くなれたし理解も深められた」といった記述がいくつも見られる一方で、「コミュニケーションの場」や「話し合いの回数」を増やしてほしいという要望も複数あった。この講義を通して学生が何を獲得できた（と感じられた）のかについては、今後とも注視する必要がある。

【おわりに】

結果が概ね良好であるのは、本授業の担当者の皆様のおかげである。基礎ゼミナール懇談会と学生懇談会で意見を寄せてくださった方々にも感謝申し上げたい。



情報リテラシー実践Ⅰ・ⅠA授業改善アンケート等について

情報教育検討部会長
大学教育センター教授
永井　正洋

【はじめに】

情報リテラシー実践Ⅰは、基礎的な情報活用の実践力を育成する科目として設置されている。また、より専門性を高めた授業として情報リテラシー実践IA（表計算ソフトを利用した統計処理）、情報リテラシーIB（表計算ソフトを利用した基礎的プログラミング）という科目も設定している。現在は、これら３科目のうち１科目を選択必修として、学部・系・コースが指定しているが、実際にはⅠとIAだけの開講となっている。本稿では、2018年度の前期末に行ったFD委員会実施の情報リテラシー実践Ⅰ・IAに関しての授業改善アンケートの結果等について報告する。

【授業評価の方法】

まず、授業改善アンケートの質問項目だが、共通項目が問１～７、個別質問項目が問８～10となっている。個別質問項目については、情報教育検討部会にて設定される。実施状況については、後掲の図中に示した。

【結果と考察】

次ページの図は、FD委員会が実施した授業改善アンケートの結果である。問８（満足度）からは、73.4％の学生が受講して満足と感じていることが分かる。また、問９（難易度）に関しては、現在の学習内容を22.8％の学生が容易だと思うのに対して、44.0％の学生が難しいと思っており、例えば、情報リテラシー実践Ⅰの学習内容を現在より専門的・応用的なものとする場合は、精査が必要なことを示唆している。次に、問３（授業外学習時間）からは、授業外での学習について、30分未満の学生が74.9％（昨年度70.0％）いることが示されている。ここで一昨年度が72.2％であったことを勘案すると、一時、増えた学習時間が減っているので留意が必要である。最後に、問４（知識・能力獲得）を見ると、特に「専門的な知識・技術」、「情報活用能力」を修得・向上できたと回答していることが分かる。一方、情報倫理の育成に関しての要請が多いものの、「８. 倫理観、社会的責任の自覚」の項目については例年あまり高くなく、引き続き、懸案事項となっている。（2014=10.8 → 2015=8.7 → 2016=8.9 → 2017=7.9 → 2018=10.8 単位％）

続いて、情報教育検討部会による授業評価アンケートの結果（図は不掲載）に関して報告する。４つの質問項目からは、学生の78.7％が、情報リテラシーが身に付いたと回答すると共に、73.2％が意欲的・積極的に授業に取り組んでいることや、71.3％の学生が教員の説明を分かりやすいと思い、また、その対応に76.6%が満足していることが分かった。

以上、まとめると、おおむね学生は意欲的に授業に取り組み、教員の説明や対応も評価すると共に、情報リテラシーが身に付いたと認識している。さらに、その結果、全般的に授業を受講して満足していたことが示されたといえる。留意すべき点としては、例年と同様に、授業内容をどちらかというと難しいと感じている学生が多くいることと、授業外での学習時間が少なくなる傾向が見られたので注視したい。

【全学での情報倫理教育について】

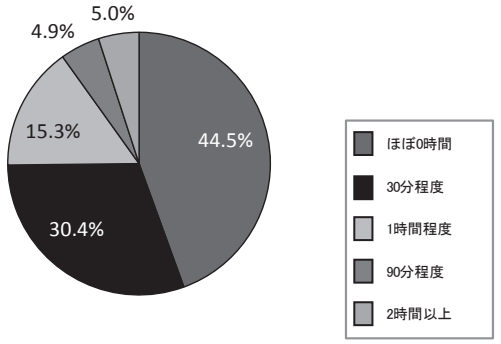
情報リテラシー実践Ⅰ・Ⅱでは、授業の中で初年次学生等が情報倫理の学習に取り組めるようカリキュラムに設定している。また、指導用のコンテンツもプレゼン資料やビデオ教材等を揃えるとともに、留学生向けの英語教材やeラーニングによる評価テストも配置している。近年では、部局からの要請があり、学部上級生や大学院生、編入生への指導も行うようになっているが、マンパワーの問題もあり、どのように対応するか今後の課題である。

〈実施期間〉　2018年7月9日（月）～2018年7月27日（金）
〈履修登録者数〉　1,673人　〈回答者数〉　1,286人　〈回収率〉　76.9%
〈授業科目数〉　40クラス　〈実施科目数〉　39クラス　〈実施率〉　97.5%
＜アンケート実施科目における回収率＞　77.1 %（回答者数/実施科目の履修人数合計）

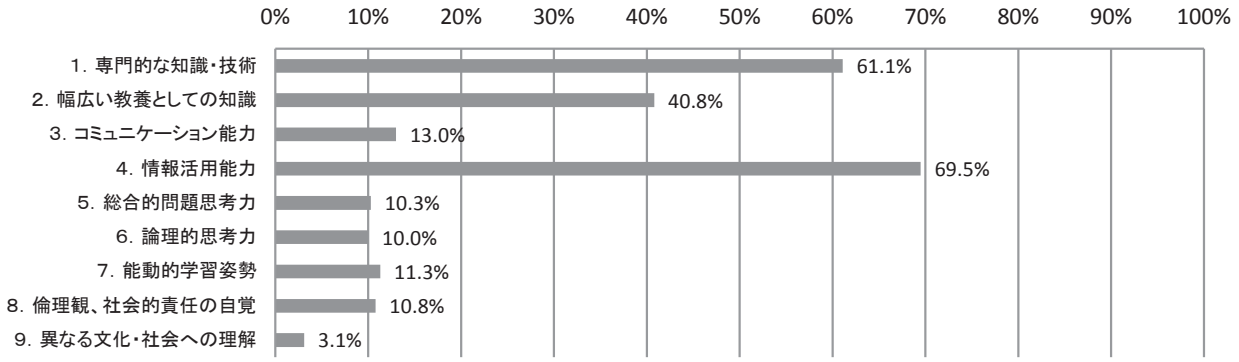
	設問文	平均	標準偏差	5.そう思う	4.ややそう思う	3.どちらでもない	2.あまりそう思わない	1.そう思わない
問1	この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.55	1.12	24.0%	26.8%	35.9%	7.0%	6.3%
問2	授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.86	0.96	24.2%	49.8%	16.7%	6.4%	3.0%
問8	この授業を受講して満足した。	3.93	1.06	33.9%	39.5%	17.1%	4.8%	4.6%
問9	授業全体を振り返って、この授業は難しかった。	3.26	1.09	12.6%	31.4%	33.2%	15.5%	7.3%
問10	チューターは学生の質問・意見に対して適切に対応した。	4.20	0.99	51.3%	25.8%	17.2%	3.4%	2.3%

データ数＝1,286

問3. 授業時間以外で一週間に平均どのくらい、この授業に関連した学習をしましたか？（予習、復習、課題、試験勉強、この授業の理解をさらに深めるための自主的学習を含む。）



問4. この授業で修得・向上できた知識や能力を選択してください（複数回答可）。



実践英語の授業改善アンケートについて

英語教育分科会座長
大学教育センター准教授
柚原　一郎

【はじめに】

本学の英語教育は、2013 年度に新たなカリキュラムを導入してから、今年度で 5 年目となった。入学時に TOEIC を利用したクラス編成テストによってレベル分けを行い、統一教科書を使用する B レベルに加え、A レベル（特に英語運用能力の高い学生）、C レベル（初学者を含め、特段の配慮を要すると思われる学生）を設定し、能力に応じた教材と教育方法によるきめ細かい指導を目指している。A レベルは約 8 名、C レベルは約 10 名のクラスサイズで運営し、大半の学生の属する B レベルは約 20 名を基準として、少人数クラスの英語教育を実践している。

【個別の質問事項について】

統一教科書について B レベルの統一教科書として用いた Inside Reading 3 は、本学の 1 年生の学力にふさわしい英語読解力と語彙力を養成し、論理的な思考法を身につけることを目指して採用したテキストである。生物学、心理学、表象文化、経済学など、学際的に幅広い分野におよぶ記事を提供し、文系・理系を問わず学生全般の知的好奇心を満足させ、専門課程への学習意欲を掻き立てる上でも役立つ内容を含んでいる。また、各課に学術的語彙リストがついており、やや難しい語彙を習得することで、英語読解のスキルアップが期待できるよう構成されている。

アンケートの問 8 は、この教科書の難易度を尋ねている。「易しい」1.8%（1.9%）「やや易しい」6.2%（4.7%）「ちょうどよい」63.2%（58.8%）「やや難しい」24.2%（28.4%）「難しい」4.6%（6.2%）であった（カッコ内は昨年度の数値）。約 6 割の学生が難易度を「よい」と考えており、今年度の統一教科書の適切性を示しているものと考えられるだろう。

学生の関心 問 9「授業の中で、一番関心を持って取り組むことができたのは何か」の質問に対しては、「内容理解」43.8%「英文和訳」26.7%「語彙の学習」14.9%「構文理解」11.4%「発音練習」3.2% という回答分布であった。昨年度はそれぞれ 39.5%、28.8%、14.5%、11.8%、5.4% であったので、特異な変化は見られず、おおむね例年どおりの割合であると言える。

今後の学習との関わり 問 10「この授業は、今後のあなたの英語学習に役に立つところがありましたか」の質問には、「そう思う」22.7%「ややそう思う」46.0%、両者の合計は 68.7% となった。この数字は昨年度の 70.7% には及ばぬものの、満足いく数値であると考える。平均値も過去最高であった昨年度の 3.82 を上回ることはないものの、3.76 を記録しており、今後の英語学習への継続性を学生がしっかり意識していることを反映した、好ましい結果と受けとめている。

【共通の質問事項について】

シラバスについて 問 1「この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だったか」に対する回答結果は、「そう思う」「ややそう思う」を合わせて 49.4% であった。昨年の 47.0% より 2.4% 上がっているが、これはほぼ例年通りの評価である。「どちらでもない」が最も多い 35.8% を占めているのは、実践英語 I が必修科目であり、授業の選択とは関わりがないところからくるものと考えられる。

授業の理解度 授業の理解度を尋ねた問 2 に対する回答は、「そう思う」「ややそう思う」が合わせて 77.8% となった。一昨年度の 76.6%、昨年度の 78.1% と、満足いく数値が続いている。理解に問題を感じた学生の割合は、昨年度の 7.2% から 7.3% と横ばいであるが、この数字を減らしていけるよう、各授業で工夫を続けていくことが望ましい。

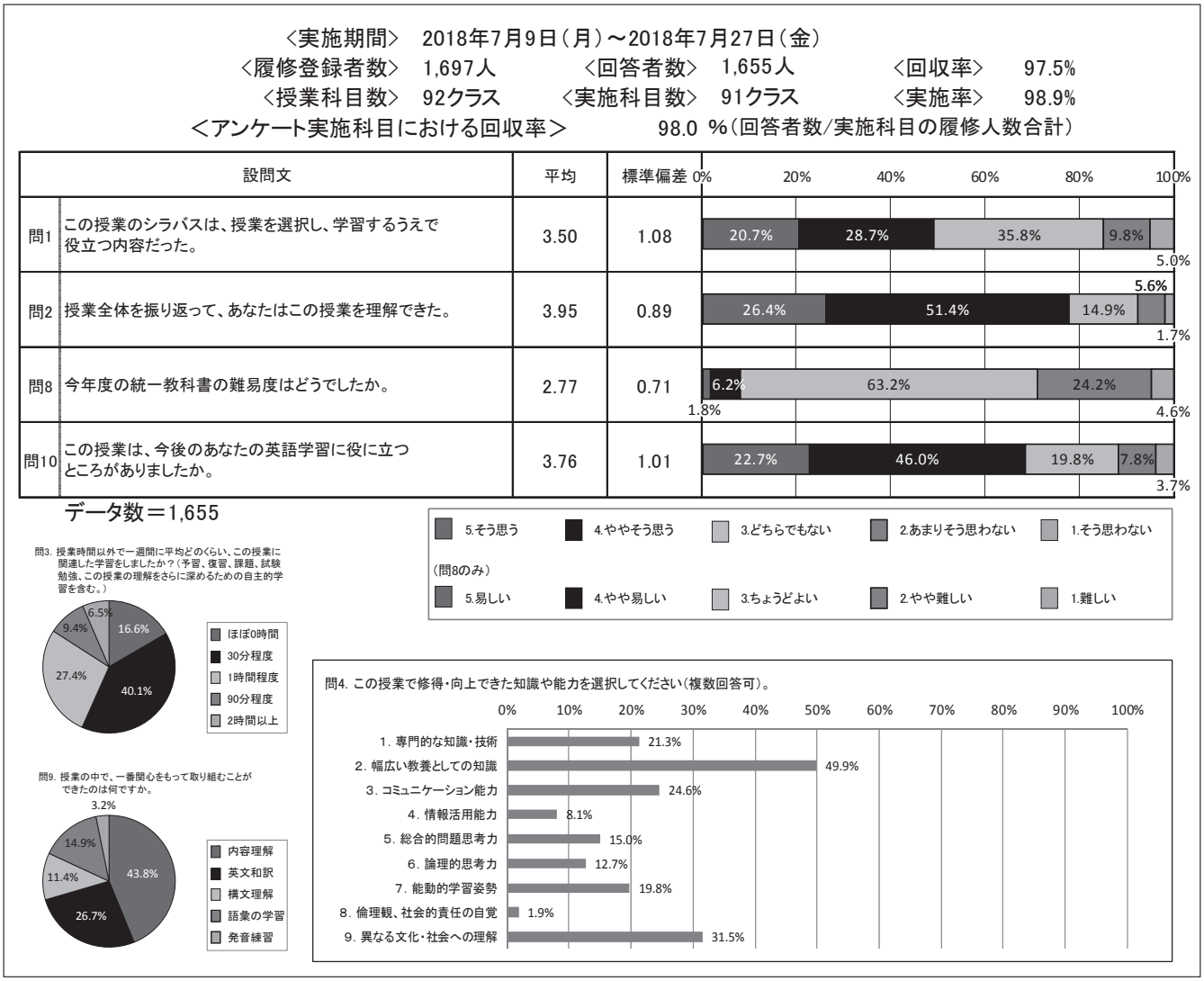
学習時間 問 3 は一週間の授業外学習時間の平均を尋ねる質問で、「2 時間以上」6.5%「90 分以上」9.4%「1 時間程度」27.4%「30 分程度」40.1%「ほぼ 0 時間」16.6% という結果であった。「1 時間程度」以上の割合の合計は 43.3% である。2013 年から今年度までの経年変化を見ると、年度順に 47.8%、50.0%、42.1%、48.6%、47.8%、43.3% となっており、50% 以下の数

値で推移している。裏を返せば、「30 分程度」と「ほぼ 0 時間」の合計が毎年 5 割以上を占めているわけで、これは好ましくない傾向と言えるだろう。「ほぼ 0 時間」の数値も 16.6% と、昨年の 15.9% から上昇しており、予習・復習や自主的学習が必須であるはずの英語においては、この数値をゼロに近づけるべく、授業外学習の重要性を学生に説いていく必要がある。

授業で得られるもの　問 4 は「この授業で修得・向上できた知識や能力」を複数回答可で選択させている。「幅広い教養としての知識」49.9%（48.2%）「異なる文化・社会への理解」31.5%（22.2%）「専門的な技術・知識」21.3%（20.1%）「能動的学習姿勢」19.8%（19.7%）「コミュニケーション能力」24.6%（18.5%）（カッコ内は昨年度の数値）という結果は、ほぼ例年どおりであり、実践英語のシラバスに掲げた「言語の背景にある文化・歴史・倫理などを深く理解し、知的視野を広げる」という目標がある程度達成されているものと評価できるだろう。

【今後の課題と展望】

新カリキュラム実施後 6 回目となる授業改善アンケートの結果は、全般的に着実な改善傾向を示している。一方で、学生の自由記述の中には、各授業に対する評価を示す意見とともに、少数ながら不満の声も散見される。授業毎のアンケート結果は各教員にフィードバックされているので、すべての学生の意見に真摯に向き合うことが大切であろう。アンケート結果を踏まえ次年度の授業の改善を目指す教員一人一人の努力が、実を結んできている手応えは十分に感じられる。統一教科書の特性を活かしつつ、クラスの習熟度に合わせて様々な工夫を凝らしながら授業を運営し、学生の自主的な授業外学習を促していくことが、さらなる英語力アップにつながるものと期待し、今後の実践英語授業の一層の改善を目指していきたい。



未修言語科目の授業改善アンケートについて

未修言語科目部会長
人間社会学部人文学科教授
大久保　明男

【未修言語科目の目的・目標】

本学では、大学入学後に初めて学ぶ言語科目のことを「未修言語科目」と呼んでおり、「第二群 」（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語）、「第三群」（ロシア語・スペイン語・イタリア語・ギリシャ語・ラテン語）の二つの科目群から構成される。本学では多くの学科が第二群の科目を必修科目、あるいは推奨科目に指定している。未修言語は人間社会学部・人文学科の担当教室のコーディネートと、未修言語科目部会の場を中心とした各言語担当教室の情報交換により、授業の健全な運営と不断の改革が行われてきた。授業（特に初級）の設定する目標は、大学入学後に初めて学ぶ外国語ということを鑑みて以下の二点に集約される。

①発音、文法、基本語彙など未修言語の基礎の習得。

②異文化に触れ国際的な視野を育むきっかけをもつ。

近年の傾向として、本学では外国語の資格取得を目指す学生が増加していること、本学と世界各地の大学との国際交流提携が推進されていることが挙げられる。また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、英語以外の多様な言語学習と異文化理解の促進のために、未修言語教育はますます重要となりつつある。

【個別の質問事項】

問 8 は、選択した言語の種別を問う設問である。各項目がどの言語科目に対する回答なのかを把握し、より精確な実態調査を行うために設けられている。ここ数年ほど、中国語とドイツ語が各 30％程度、フランス語が 20％程度、朝鮮語が 10％程度の割合で安定していたが、本年度は、中国語が 39.4 ％、ドイツ語が 36.6％、フランス語が 19.3％、朝鮮語が 4.7％と、中国語履修者の増加が目立つ。アジアにおける中国の成長、ここ数年領海問題などで冷え込んだ日中関係の改善の兆しが現れたことなどが背景にあるように思われる。今後の推移を見守りたい。

問 9 と 10 は 2015 年度のアンケートから新しく設定された設問で、先に述べた未修言語教育の二つの目標に対応するものである。この質問は、学生の未修言語に対する満足度や要求、異文化理解の程度を反映するもので、授業改善に大きな役割を果たしてくれる。

問 9 は、授業で外国語を学ぶなかで最も有益だった学習内容を問う設問である。受講生は話す・聞く・読む・書くの四技能を総合的に習得していく。どの学習内容に関心をもったのかを理解することで、学生の学習傾向を把握することができる。

結果は、「文法説明」41.6％、「発声練習」31.4％、「語彙の学習」16.2％、「外国語作文」2.7％、「和訳」8.1％となっており、前年度の数値とさほど変わっていない。「文法説明」と「発声練習」が大きなポイントを示すのは、外国語の初級者の感覚から言って、よく理解できることであるが、「語彙の学習」「 和訳」のポイントが低いのは、授業外学習に時間を割かない、語彙が習得できないから「和訳」が面倒に感じられる、と言う悪い傾向が現れているのではないか。辞書をよく引き、単語帳を作り、しっかりと暗記しながら訳す、という外国語を読むための基本姿勢をもっと徹底的に学生に言って聞かせる必要があるだろう。「外国語作文」がもっとも低くなっているのは、限られた授業時間内に作文に取り組む余裕がないことの反映ではないかと思われる。四技能のバランスを取る観点から見れば、ここは少し高める必要があるだろう。

問 10 は、未修言語の授業が異文化への興味・関心を引くきっかけとなったかどうかを問う設問である。そうした関心を抱くことで、海外留学などを視野に入れて学習を続けていくモチベーションともなるだろう。結果は、昨年と同様、「そう思う」「ややそう思う」が全体の 80％を上回っている。未修言語の習得が言語の習得だけでなく、異文化理解への契機になっていることがわかる。実際、それぞれの教員は、写真や DVD 教材、音楽などを使用して、外国文化の紹介をうまく授業に取り入れている。

【共通の質問項目】

問 1 で問われた「シラバスの有用性」については、「そう思う」「ややそう思う」が 53.5％、過去二年度とほぼ同様で、50％を上回っているので、シラバスの有用性はある程度実証されている。ただし、「どちらでもない」「そう思わない」「あまりそう思わない」が半数

近くある事実も無視できない。今後、未修言語科目の性質に合ったシラバスの書き方を検討する必要もあるだろう。

問２の授業理解に関する質問に関しては、「そう思う」「ややそう思う」は一昨年度 71.6 %、昨年度 70.6%より若干増えて、あいかわらず比較的高い理解度を示している。

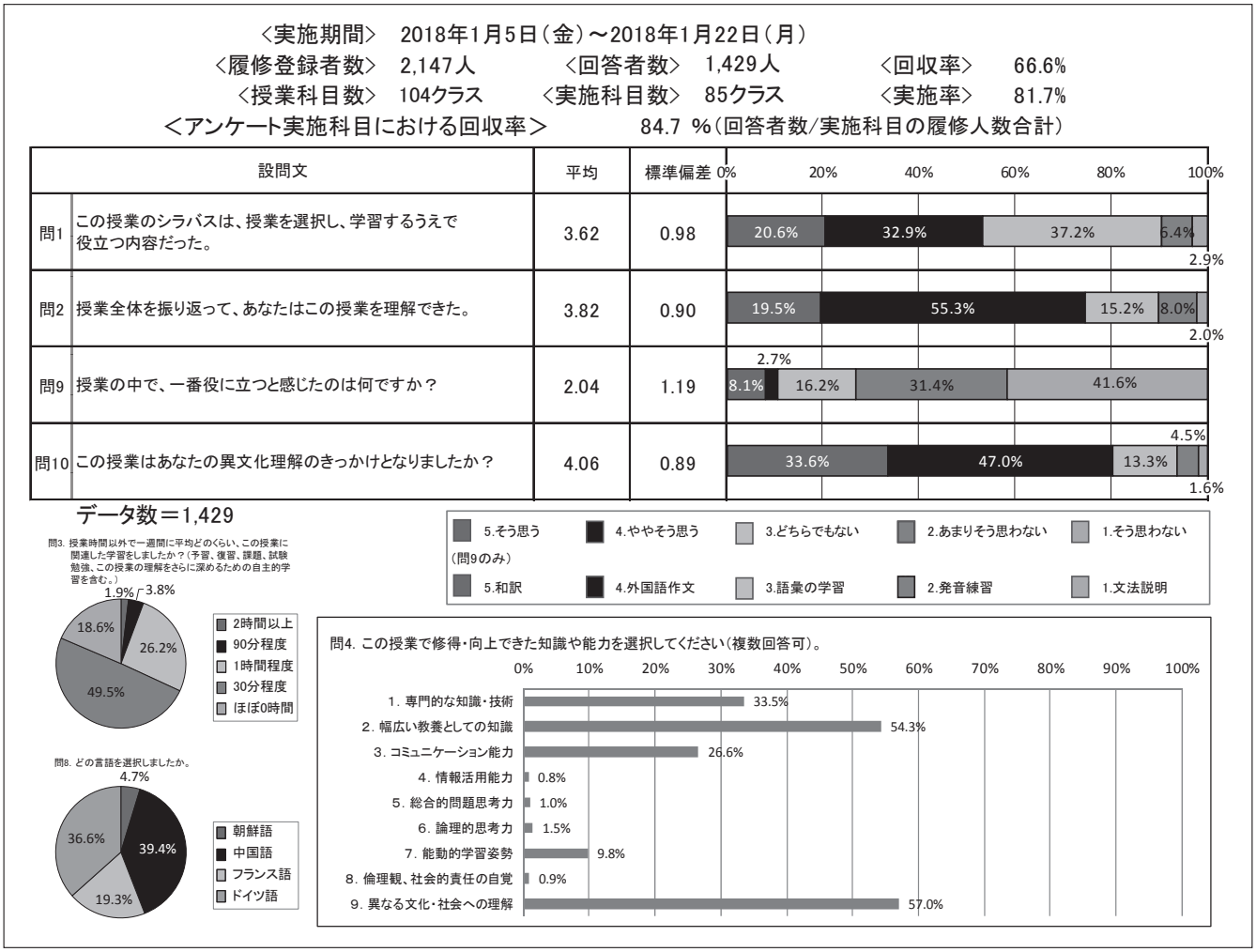
問３については、授業以外での学習時間が 90 分程度以上の割合は 5.7%、昨年度の 11.0%、一昨年度の 8.9%より一段と低下した。逆に週１時間程度以下の割合は 75.7%（昨年度 71.2%、一昨年度 71.6）と高い数値を示している。これは学習指導上の課題である。未修言語を習得するためには、ある程度の時間をかけた、予習や復習、実践が必須だが、この結果は大多数の受講者は授業外ではほとんどその機会を持たないことを示している。「ほぼ０時間」と答えた 18.6%（昨年度 17.9%）の学生の、主体的能動的な学習姿勢を促すことが課題となっている。

問４での、授業を通して得られた知識・能力として、「専門的な知識・技術」「幅広い教養としての知識」「コミュニケーション能力」「異なる文化・社会への理解」がいずれも、昨年度とほぼ同じ高い数値を示しており、未修言語科目の教育目的はおおむね達成されていると評価できる。言語の習得には主体性が不可欠であるが、「能動的学習姿勢」は 9.8%（昨年は 12.7%）と依然として低い数値で、指導の工夫が求められる。

【全体的な傾向と今後の課題】

それぞれの項目で前年度調査より大きな変動はなく、未修言語学習が安定した成果を上げていると言える。ドイツ語・フランス語・中国語に関しては、担当教員の多大な尽力もあり、交換留学制度が充実している。長期留学だけでなく、夏期春期休暇中の短期研修も整備されていることは学習の継続へのモチベーションとなっている。2018 年度からは単位化され（2 単位）、利用希望者の増加が期待される。

今後の課題として、学生側にはやはり学習時間の確保が重要だろう。言語の習得はどうしても時間が必要である。新しい言語を学ぶには、授業の予習・復習を通じて、基礎を少しずつ確実なものにするしかない。教員側では、外国語の教授を通じて、外国の歴史や文化について話したり、ヴィジュアルで見せたりするなど、受講生の学習意欲を高める工夫がいっそう必要である。



理系共通基礎科目の授業改善アンケートについて
アンケート結果からみるFD活動の成果と課題

理学部ＦＤ委員会委員長
理学部化学科准教授
中谷　直輝

【理系共通基礎科目の目的・目標】

本学では、数学、物理、化学、生物学などの自然科学分野における基礎的な内容を取り扱う一般教養科目を、「理系共通基礎科目」として全学部学生を対象に開講している。本年度より、旧・都市教養学部理工学系の電気電子工学コースと機械工学コースがシステムデザイン学部へ統合され、数学コース、物理学コース、化学コース、生命科学コースは理学部として再編された。そのため、科目数などに変更はあったものの、数理科学、物理学、化学、生命科学、電気電子工学、機械工学関係の6分野・計24科目61クラスが2018年度前期に開講され、内56クラスで授業改善アンケートが実施された。本科目群は、理系学部・学科において、少なくとも関連分野の科目が必修科目として設定されており、また他分野の科目についても一定数を修得することが卒業要件となっている。

【理系共通基礎科目・独自質問項目】

2018年度前期の授業改善アンケートでは、以下の3つの質問が、理系共通基礎科目に関する独自の質問項目として設定された。

問8.　授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？

問9.　あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？

問10.　この授業のテーマは自分の関心にあっていた。

問8および問10に関しては、回答の経年変化を追跡する目的から前年度までに実施されたものと同じ内容となっている。一方で問9については、前年度までは「快適な環境下でこの授業を受けることができた。」という質問を設定していたが、これは共通質問項目の問7「その他、この授業やカリキュラム全体および授業設備等について、自由に意見を書いてください。」との重複が大きいことから、2018年度前期からは問9に設定していた授業環境に関する質問項目を削除し、その代わりとして授業難易度に関する質問項目が追加された。

個別のアンケート結果に着目すると、問8のクラスの人数については「ちょうどよかった」と回答した学生が71.4％となっており、2017年度の70.8％、2016年度の68.6％と比べても続伸していることが分かる。都市教養学部から理学部へ再編となった影響が懸念される項目であったが、その影響は少なくともマイナスにはなっていないようである。一方で問10については、前年度と比較して「そう思う」「ややそう思う」の割合が少し減少し、「あまりそう思わない」「そう思わない」の割合は逆に少し増加している。再編による影響なのかもしれないが、少々気になる結果となっていた。

新たに設定した問9については、「ちょうどよい」と答えた学生が約半数の48.6％となったが、一方で、「難しい」「やや難しい」と答えた学生の合計も47.6％と、拮抗した結果となった。とは言っても、安易に講義の難易度を下げることは、本学の学修レベルを維持する上では何の解決にもならないし、将来的には学生にとってマイナスの影響の方が大きいだろう。したがって、講義形態や説明内容の改善、授業外学習時間の確保を促す取り組みなど、まさに今後のFDが担うべき課題が浮き彫りになったとも言える。

【共通の質問項目】

共通の質問項目のアンケート結果に注目すると、問1のシラバスに関する項目、問2の授業の理解度に関する項目では、「そう思う」「ややそう思う」と答えた学生の合計が、それぞれ50.2％、55.0％といずれも半数を上回っており、前年度の49.8％、53.4％と比較しても微増となった。これらの項目は、FDセミナー等の成果が表れやすいと考えられるので、FDセミナーの継続はもとより、部局FDセミナー等の開催によるさらなる向上に期待したい。

問4については、「専門的な知識・技術」が向上したと答えた学生の割合が63.8％と最も多く、次いで「論理的思考力」の29.8％、「幅広い教養としての知識」の27.7％と続いている。特に専門的な知識や論理的思考力は、自然科学分野において必須と言える知識や能力であるため、当然と言えば当然の結果であるが、理

系共通基礎科目がその役割をきちんと果たしていると言えよう。

【授業外学習時間の経年比較について】

問３の授業外学習時間について、2012 年度から 2018 年度の前期開講科目に対する経年比較を見てみると、理系共通基礎科目では、「1 時間以上」と答えた学生の割合が約 40 ～ 45％と、基礎ゼミや外国語科目と同程度の比較的高い水準で推移している。また、前年度との比較では、3.7 ポイントの減少となっている。2018 年度は全体的に学習時間が微減する傾向が見られていたので、年度毎の誤差の範囲であると考えられるが、少なくとも授業外学習時間については頭打ちとなっているのが現状であろう。理系共通基礎科目は、レポート課題等のために比較的授業外学習時間が長くなりやすいことを踏まえると、アクティブラーニングの導入など、授業外学習時間の確保のための対策が今後の大きな課題となる。

【今後の課題と展望】

理系共通基礎科目に関する授業改善アンケート全体を通してみると、講義の質という点では、ある一定の水準にまで到達し、授業に対する「学生の満足度」という意味ではこれ以上の改善は難しくなってきているのかもしれない。一方で、問３の授業外学習時間の経年比較や、理系共通基礎科目の独自質問として本年度から設定した問９の結果を鑑みると、「学生の理解度」や「単位の実質化」という観点では、まだまだ不十分であるように感じる。理系科目に関しては、数学や物理学といった数式や論理的思考力を必要とする学問に対して苦手意識を持つ学生が一定数存在するため、現在の講義水準を落とさずに、彼ら・彼女らをケアできるような講義設計が今後大きなテーマとなるのではないだろうか。

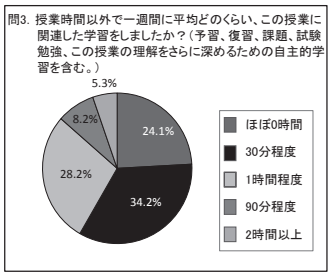
今後、FD・アクティブラーニングセミナーの拡充や各部局での開催等、共通性の高い FD はもとより、専門性の高い FD が求められるようになってきたのではないかと感じた 1 年であった。

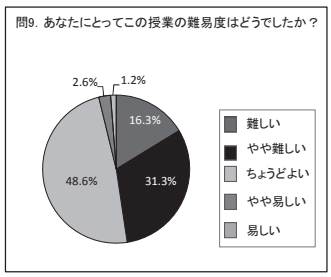
〈実施期間〉 2018年7月9日（月）～2018年7月27日（金）
〈履修登録者数〉 4,220人　〈回答者数〉 3,411人　〈回収率〉 80.8%
〈授業科目数〉 61クラス　〈実施科目数〉 56クラス　〈実施率〉 91.8%
＜アンケート実施科目における回収率＞ 87.4 %（回答者数/実施科目の履修人数合計）

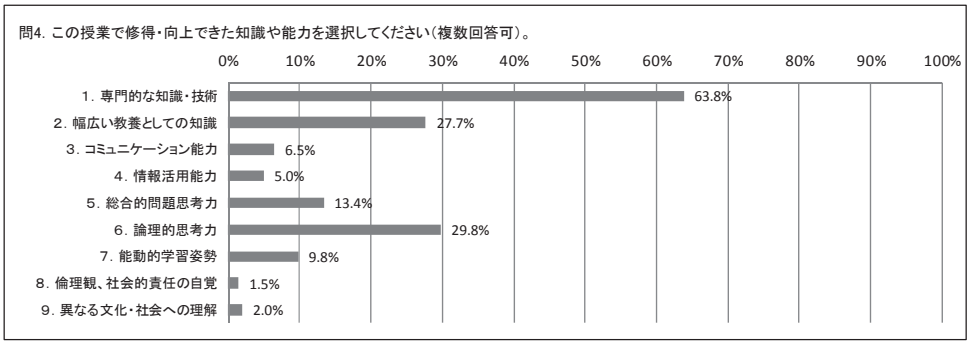
	設問文	平均	標準偏差	5.そう思う	4.ややそう思う	3.どちらでもない	2.あまりそう思わない	1.そう思わない
問1	この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.53	1.01	18.7%	31.5%	38.1%	7.6%	4.1%
問2	授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.42	1.09	13.9%	41.1%	24.5%	14.3%	6.3%
問8	授業の内容や形態を考えると、このクラスの人数はどうであったと思いますか？	3.31	0.67	7.6%	18.5%	71.4%	1.7%	0.7%
問10	この授業のテーマは自分の関心にあっていた。	3.21	1.02	9.6%	29.0%	41.1%	13.5%	6.8%

データ数＝3,411

（問8のみ）　5.多かった　4.やや多かった　3.ちょうどよかった　2.やや少なかった　1.少なかった







保健体育科目の授業改善アンケートについて

基礎教育部会・保健体育科目担当
大学教育センター准教授
西島　壮

【保健体育科目の目的・概要】

保健体育科目は、身体や運動に関する幅広い知識を学び、知的・身体的な教養を身につけ、心身ともに健康で豊かな人間性を育むことを目的としている。身体運動学（理論、2単位）、身体運動演習（演習、2単位）、スポーツ実習（実習、1単位）とコンセプトの異なる3つの科目から構成されており、学生は自らのニーズに応じて自由に選択し履修することができる。身体運動演習は、共通の測定実習（第2～4週）を行った後、第5週目以降はスポーツ種目（前期19種目、後期7種目）ごとに分かれて授業を実施する。スポーツ実習では、定時の授業時間帯で実施する定時コース（前期7種目、後期13種目）に加えて、長期休暇中に実施する集中コース（夏季2種目、冬季1種目）を提供している。

【アンケートの実施状況について】

保健体育科目では、これまで独自に授業評価アンケートを行っていたが、昨年度から身体運動学を、そして今年度から全ての実技科目を全学共通科目と同じフォーマットで実施した。したがって、本FDレポートに保健体育科目の授業改善アンケート結果を報告するのは、今回が初めてとなる。なお本アンケートでは科目別に集計・分析を行っておらず、3科目全体での結果となる。2018年度前期のアンケート回答科目は27クラス（100%）、回答者数は587人（履修登録者の98.8%）であった。

【個別の質問項目について】

問8では、この授業で自分自身の知識・技能に発展・向上があったかを尋ね、「そう思う（51.3%）」と「ややそう思う（37.7%）」と回答した学生は合わせて89%であった。問9では、この授業によって運動やスポーツへの関心が高まったかを尋ね、「そう思う（58.6%）」と「ややそう思う（29.4%）」と回答した学生は合わせて88%であった。そして問10では、この授業を受けて満足したかを尋ね、「そう思う（73.1%）」と「ややそう思う（19.9%）」と回答した学生は93%であった。以上3つの質問に対する結果から、保健体育科目全体を通じて、履修した学生の知識・技能や関心を向上させるために有益な授業を提供できたと言えよう。しかしながら、保健体育科目は選択科目であるため、もともと運動・スポーツに関心の高い学生が多く履修しており、その結果、このような高い評価になった可能性も考えられる。この評価に甘んじることなく、今後は授業の課題・改善点を顕在化できるような質問項目を検討するなど、引き続き授業の改善に努めたい。

【共通の質問項目について】

問1で問われたシラバスの有用性については、「そう思う（44.0%）」と「ややそう思う（30.2%）」と回答した学生は合わせて74%であった。保健体育科目では昨年度まで独自にシラバスを発行しており、全学共通科目シラバス（WEBシラバスを含む）には3科目それぞれで共通内容のみを記載しており、学生は各授業（スポーツ種目）の詳細を共通シラバスで確認することができなかった。そこで本年度から、全ての授業（スポーツ種目）を共通シラバスに掲載するように改善した。また、たとえ実施するスポーツ種目及び授業担当者が異なったとしても身体運動演習（あるいはスポーツ実習）は同じ授業方針・テーマの下で実施していることから、共通の記載内容を定めシラバスに記載した。このような改善により、比較的高い評価となったのだろう。

問2で問われた授業の理解度は、「そう思う（54.1%）」と「ややそう思う（33.7%）」と回答した学生は合わせて88%であり、授業の難易度は適切であったと考える。

問3で問われた1週間に平均的な授業外学習時間については、「ほぼ0時間（66.9%）」と「30分程度（17.1%）」と回答した学生は合わせて84％であった。この授業外学習時間の少なさは、現在の保健体育科目

が抱える最も重要な課題と考える。なお授業外学習時間の経年比較において、昨年度と比較して今年度で「0時間未満」と回答した学生が大幅に増えたが、その理由は今年度から実技科目（演習・実習）が加わったためである。つまり、実技科目では授業外学習がほとんど行われていないことを示している。たとえ実技科目であっても、授業内で見出した課題の解決に主体的に取り組むことは大切であり、なにより「心身の健康」を獲得するためには日々の意識や実践が重要となる。今後は、他大学の実践例を参考にするなどこの課題解決に直結する FD 活動を推進し、授業外学習時間の増加に努めたい。

問 4 で修得・向上できた知識や能力を問うたところ、5 割以上の学生が「専門的な知識・技術（56.3%）」、「コミュニケーション能力（52.4%）」を挙げた。特にスポーツはコミュニケーションを円滑にする極めて有効な手段であり、そのスポーツを介した教育の場である保健体育科目は、コミュニケーション能力を高める絶好の機会となる。今後も、スポーツを通したコミュニケーション能力の向上を重視し、その意義を学生に伝えていきたい。続いて約 3 割の学生が「能動的学習姿勢（29.3%）」、「幅広い教養としての知識（25.8%）」を挙げたが、それ以外の 5 項目を挙げた学生は 1 割に満たなかった。これを科目特性として仕方がないととらえるのではなく、保健体育科目でもこれらの能力を向上させることができないか、検討していきたい。

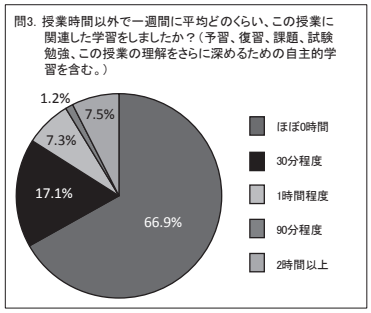
【今後の課題と展望】

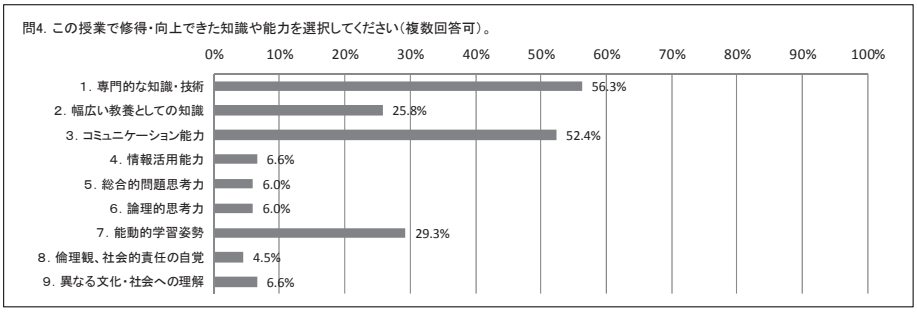
冒頭でも述べたように、全学共通科目と同じフォーマットで授業改善アンケートを実施したのは今回が初めてであった。今後は、今回のアンケートにより顕在化した課題（個別の質問項目の検討、授業外学習時間の少なさ、など）の解決に取り組み、その成果を経年的に分析することを通して、保健体育科目の授業改善に継続的に取り組んでいきたい。また近年は保健体育科目の受講者数が減少傾向であることも、大きな課題である。受講者数の増加も大きな課題ととらえ、取り組んでいきたい。

〈実施期間〉 2018年7月9日（月）～2018年7月27日（金）
〈履修登録者数〉 594人　〈回答者数〉 587人　〈回収率〉 98.8%
〈授業科目数〉 27クラス　〈実施科目数〉 27クラス　〈実施率〉 100.0%
＜アンケート実施科目における回収率＞ 98.8 %（回答者数/実施科目の履修人数合計）

	設問文	平均	標準偏差	5.そう思う	4.ややそう思う	3.どちらでもない	2.あまりそう思わない	1.そう思わない
問1	この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	4.10	1.00	44.0%	30.2%	20.0%	2.9%	2.9%
問2	授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	4.36	0.87	54.1%	33.7%	8.1%	1.9%	2.1%
問8	この授業で自分自身の知識・技能に発展・向上があった。	4.36	0.82	51.3%	37.7%	7.9%	1.7%	1.5%
問9	この授業によって運動やスポーツへの関心が高まった。	4.43	0.80	58.6%	29.4%	9.7%	1.3%	1.1%
問10	総合的に評価すると、この授業を受けて満足した。	4.63	0.73	73.1%	19.9%	5.0%	0.8%	1.2%

データ数＝587





教養科目群・基盤科目群の授業改善アンケートについて

教養・基盤科目群検討部会長
都市環境学部環境応用化学科准教授
加藤　俊吾

【はじめに】

教養科目群・基盤科目群は、それぞれ幅広い教養を身につけること、専門教育の基礎となる知識・技術を修得すること、または専門とは異なる分野を学ぶことを主な目的としています。教養科目群は①都市・社会・環境、②文化・芸術・歴史、③生命・人間・健康、④科学、技術、産業の４つのテーマに分類され、基盤科目群は①人文科学領域、②社会科学領域、③自然科学領域、④健康科学領域の４つの領域に分類されています。特定のテーマ・領域に偏らないように履修することが推奨されます。

ほとんどの学生が 1、2 年次に教養・基盤科目を受講し終えるため、授業改善アンケートは、比較的きちんと回答をしてもらえているのではないでしょうか。また、全学共通科目はアンケートの回答数も多いため、比較的安定したデータを取得できることが予想されます。そのため、継続して授業改善アンケートをとり続けていくことが必要となります。

【授業改善アンケート実施状況】

2018 年度前期に実施された教養科目・基盤科目の授業改善アンケート結果について説明します（キャリア教育科目も含んだ集計結果となっています）。73 クラスの授業科目のうち 63 クラスでアンケートが実施され、実施率は 86.3% となっています。履修登録者数は 9,919 人でそのうち回答者数は 7,248 人となっており、回収率は 73.1% となっています。アンケート実施科目だけに限ると、回収率は 81.1％となります。

2017 年度前期と比較すると回収率は改善しており（昨年度 53.2% →本年度 73.1%）、今後も回収率を落とさず有効な回答数が維持されるようにしていく必要があります。

【評価結果】

問 1 のシラバスが授業選択のうえで役にたったかどうかで、61% は肯定的な答えとなっていますが、どちらでもないが 29%、あまりそう思わないが 7% みられます。特に肯定的な回答の 61％のうち、「そう思う」の割合は、昨年度の 22.5％から 24.2％とわずかでも上回っており、近年シラバスの記載内容を充実するのに教員・職員が作業努力をしているため、その効果が表れている様子が伺えます。より多くの学生がシラバスを有効利用してもらえるように工夫をしていけたらよいと思います。

問 8 の授業の難易度ですが、肯定的な意見はわずかで、どちらでもないが 52％、否定的な回答が 45％になっています。教養・基盤科目という位置づけであるので、専門外の分野の学生にも適切な難易度の授業計画していただけるとより教養科目としての位置づけが明確になり、更に広い教養を身につける機会を提供できるのではないかと思います。しかし、問 2 の授業を理解できたかどうかについては 62% が肯定的な回答となっており、問 8 の結果とは矛盾しますが、そこまで簡単にする必要もないとも言えます。

問 9 の受講により視野が広がったかどうかは教養科目の大きな目的であるといえますが、69% は肯定的な回答となっており、おおよそ目的は達成できていると言ってよいと思います。

問 4 の修得できた知識能力ですが、幅広い教養が 67% となっており、教養科目としての役割を果たしていることが伺えます。また、専門的な知識技術も 45％と高く、基盤科目としての役割も果たせていると考えられます。一方、受講者が多数の講義もあるため、コミュニケーション能力、総合的問題思考力、能動的学習姿勢などにおいては全体としてはあまり高い評価を得られないのは仕方がないと思います。

問 3 の時間外学習ですが、ほぼ 0 時間が 55％、30 分程度が 29% となっており、大学の講義（講義時間の倍ほどの授業外学習の時間を必要とする）としては厳しい回答結果となっています。専門外の学生が多く受講する教養科目において、多くの授業外学習を課す講義を行うのは容易なことではありません。しかし、大

学の講義の質を高めていくためにも、可能なところから授業外学習を増やすよう授業設計を行うのが望ましいでしょう。

問 10 のクラスの人数ですが、ちょうどよかったが 63% と多くなっていますが、多い・やや多いの合計が 35% もあります。受講人数を制限する措置（140 人以下）をとる講義もありますが、この制限人数でもかなり大人数での講義となってしまいます。学生が受講したい講義を制限するのは望ましくはないですが、もし学生の学術的な興味からではなく単位を取得しやすいなどの理由で受講人数が増えてしまうのであるのであれば、何らかの措置を検討していくほうが教員の負担も学生の不満（人数が多すぎる）も解消される方向にいくはずだと思います。

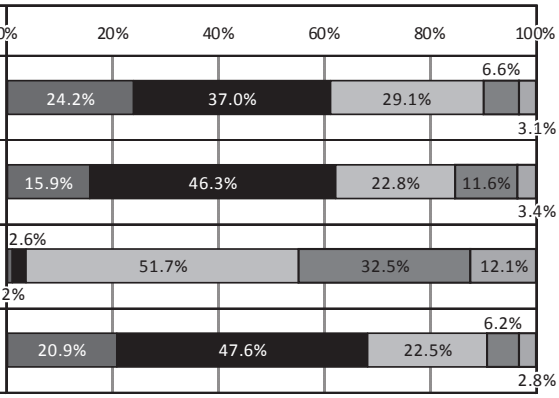
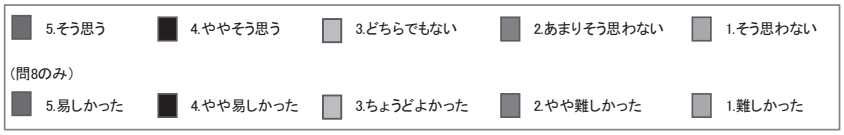
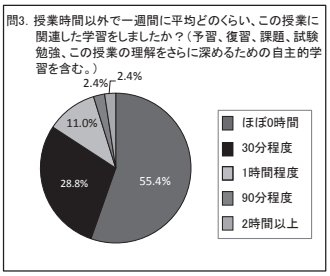
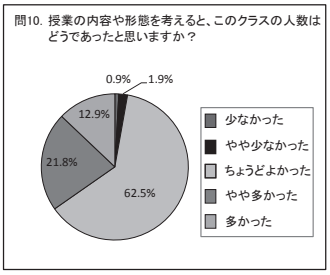
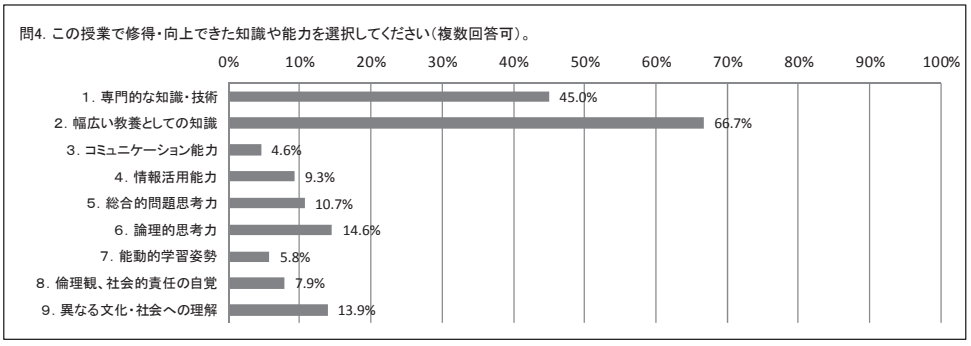
【今後の課題】

全学共通科目の授業改善アンケートは比較的質の良いアンケート結果が安定して得られるため、継続して行っていく必要があります。

それに加えて、自由記述についても活用していけたらより効果的なアンケートになるのではないでしょうか。現状では自由記述はそれぞれの講義担当教員には伝えられていますが、一覧が各部会長まで渡されている状況です。全ての記述はデジタルデータ化されていますが、一覧のままであり、同様なものを取りまとめるなどすればもう少し活用をできるはずです。他の講義で学生から多く寄せられた良かった点、悪かった点を参考にして、今後の授業改善に活かせるようにできたらアンケート結果がよりフィードバックできるのではないでしょうか。

〈実施期間〉 2018年7月9日（月）～2018年7月27日（金）
〈履修登録者数〉 9,919人　〈回答者数〉 7,248人　〈回収率〉 73.1%
〈授業科目数〉 73クラス　〈実施科目数〉 63クラス　〈実施率〉 86.3%
＜アンケート実施科目における回収率＞ 81.1 %（回答者数/実施科目の履修人数合計）

	設問文	平均	標準偏差
問1	この授業のシラバスは、授業を選択し、学習するうえで役立つ内容だった。	3.73	1.00
問2	授業全体を振り返って、あなたはこの授業を理解できた。	3.60	1.00
問8	授業全体を振り返ってみて、あなたにとってこの授業の難易度はどうでしたか？	2.48	0.78
問9	この授業を受講したことによって、自分の視野が広がったと思いますか？	3.77	0.94



データ数＝7,248